帰る家はありますか？　　ルカ 15:11～24

あるホームレスの人の支援をしている先生が東京の私立高校の講演に招かれた時にこんな話をされました。話の始めに高校生たちに「君たちの中にホームレスの人はいますか」と問いかけられます。東京の私立高校に通う生徒達ですからもちろんホームレスの子がいるわけはありません。ですからそう問われた生徒たちは笑うのです。しかしこの先生は続けてこう語ります。「いわゆるホームレスと呼ばれている人たちは、住む家がないのでハウスレスと言えます。あなたがたの中には、住む家がないハウスレスの人はいないだろう。けれども、住む家はあってもホームのない人は沢山います。自分が本当の意味で帰ることができる所、そこに帰れば温かく迎えてもらえて、悩みや苦しみを打ち明けることができて、それを分かってくれる人がいる、そういうホームがないという人がいる。」さらに続けて「今の時代は多くの人がホームレス化していっています。さらに自分ひとりで生きていく。自己責任で生きていく。そのようなことが強調されるような時代です。もう一回聞きます。きみたちはホームレスではありませんか？　大丈夫ですか？　人は死にたくなることがあります。何回も。もういなくなりたいと思う日もあります。そのとき、きみたちはどこに帰りますか？　今すぐだれかの顔が浮かばなかったとしたら、きみはホームレスです」。この指摘に私たちははっとさせられます。自分はホームレスでないと言えるだろうか、安心して帰ることができて、温かく迎えてくれて、悩みや苦しみを打ち明けることができて、それを分かってくれる人がいる、そういうホームが自分にあるだろうか、もう死んでしまいたいと思うようなつらさ、悲しみに直面する時、自分には帰る家があるのだろうか、安心して涙を流せるような場はあるだろうか？そのように問わずにはおれないのではないでしょうか。

今日はルカの福音書１５章１１節以下の、イエス・キリストがお語りになった一つのたとえ話を見てゆきたいと思います。この話はあまりにも有名で教会では「放蕩息子のたとえ」と呼ばれています。放蕩に身を持ちくずしてしまった息子の話です。しかしよく考えてみると、「つながっているべきホームを失ってしまった息子の話」なのです。そのことを、この話をたどりながら見ていきたいと思います。

「ある人に二人の息子がいた。」と始まります。先ずは弟のことが語られていきます。今日は弟を取り上げます。弟は父親に「お父さん、財産のうち私がいただく分を下さい」と言いました。つまり、父が死んだ時に自分が相続するはずの遺産を先にくれと言ったのです。生前贈与して欲しいと言ったのです。そして父からその財産をもらうと、彼は全部を金に換え、遠い国に旅立ちました。要するに家を飛び出していったのです。彼は自由になりたかったのでしょう。父の家で家族と共に暮らしているのが、彼にはたまらなく窮屈で不自由な、がんじがらめに縛られた生活に感じられたのです。もっと自分の思い通りに生きたい、自由にしたいことをして暮らしたい、自分の力をこの世の中で試したい、そんな思いで家を出たのでしょう。ただ、それなら、何も持たずに出て行って、裸一貫で生きていけばよさそうなものです。ところが彼はそうはせずに、父の遺産をもらって出ていくのです。そこに自立していない彼の根本的な甘えがあります。自由になって、一人で生きていくのだと言いながら、父親の財産をちゃっかり持って行くのです。自分にとって遺産さえもらえればもうあんたは用済みだ。ですから息子に言われた通りに財産を分けてやったこの父親は、随分お人よしの、子供を甘やかしている親だなと感じます。この息子は、父親のそういう甘さにつけ込んで、けっこうな現金を手に入れて、意気揚々と家を出て行きました。こんな家はもういらない。もうここに戻って来るつもりはない。自分は外の世界で、自由に思い通りに生きていくのだ。彼はそのようにして家を出たというより家を捨てたのです。

このように家を捨て、自由になった彼はどうなったでしょうか。彼は遠い国で、「放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった。」とあります。もともと自分で苦労して得た金ではありません。父からもらったものです。苦労してお金を得たことがない人は、お金の使い方も分かりません。彼はその金を生かして用いることができずに、無駄遣いしてしまったのです。気がついたら「何もかも使い果たし」ていました。そこに飢饉が起り、彼は食べるにも困り始めたのです。ある人のところに身を寄せ、豚の世話をするようになりました。豚はイスラエルの人々にとっては汚れた動物ですから、豚の世話というのは、誰もし

たくない卑しい仕事ということです。彼はそこまで落ちぶれ、しかも豚の餌を食べたいと思うほどでそれこそ豚にも軽蔑されるような？存在と言えるかもしれません。この一言に、彼が陥った状態が象徴的に表現されています。つまり彼は、困った時に助けてくれる本当の友人をただの一人も得ることができなかったのです。このようにして彼は、どん底の苦しみに落ちてしまいました。それは貧しさや飢えの苦しみという以上に、温かく迎えてくれ、悩みや苦しみを打ち明けることができる人が一人もいない苦しみ、要するに愛してくれる人が一人もいない孤独の苦しみです。

このような苦しみのどん底においても、よく人はささやかなプライドのゆえに、「昔あんなに世話してあげたのに恩知らずだ」とか「世間は冷たい」、「自分がこうなったのはあの人のせいだ、この人のせいだ」とか言ってますます孤独に陥ったりするものです。この弟はどうしたでしょうか？　彼は「我に返った」と１７節にあります。「我に返った」とは、自分を見失っていたことに気づいたということです。さらに言うなら、自分の外のこと、つまり他人の言動や行いにばかり目が行っていたことから、自分自身に目が向けられたということです。彼は我に返って、何に気づいたのでしょうか。１７節にこう語られています。「父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている」。彼は父のところ、自分が飛び出してきた家を思い出したのです。家を追い出されたわけではありません。自分で勝手に飛び出してきたのです。そこでは、雇い人でさえも十分に養われていました。まして彼は息子だったのです。親子としてのつながりがあり、父の大きな愛の中で養われていたのです。しかし彼はその愛に気づかず、そこを飛び出してしまいました。その父の家こそが実は自分のホームだったことを皮肉なことに自分が絶対絶命な状況に陥った時に気づいたのです。「失って初めて知る本当に大切なもの」ということです。それから彼はどうしたのでしょうか？　そこが大切な点です。彼は、１８節「立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。』」とこのように決心しました。つまり彼は自分の罪に気づいたのです。父の愛を愛として受けとめずに自分を縛りつけるものとして嫌い、家を飛び出したこと、しかもその愛につけ込んで財産をせしめ、それを浪費してしまったこと、それらは父の恩を仇で返す罪だったことに彼は気づいたのです。自分が今陥っている苦しみや孤独は、誰か他の人のせいでも、社会が悪いのでもなくて、自分自身の罪にこそ原因があることに彼は気づいたのです。

弟息子が我に返って気づいたこの自分の本当の姿は、そのまま私たちの姿でもあるのではないでしょうか。私たちも、自由を求め、自分の思い通りに生きたいと願っています。神を信じる信仰はその妨げになる、信仰は窮屈な、不自由な、がんじがらめに縛られた生活を生む、だから神から自由になって、自分の可能性を伸ばして歩みたい、などと思っているのです。しかし私たちがそのように自由に生きるために用いている人生の元手は全て、神様が与えてくれたものではないでしょうか。私たちのこの体も、健康も、様々なことをする能力、才能も、あるいはそれを生かす機会も、私たちが自分で作り出したものではありません。私たちは神様が与えて下さった元手を用いて人生を歩んでいるのです。今持っているお金は自分が苦労して働いて得たものだ、と主張するかもしれません。しかしそれを得ることができたのは、持って生まれた能力や、それを生かすことができる環境が与えられていたからで、それを備えて下さったのはやはり神様なのです。つまり私たちはあの息子と同じように、父の愛によって分け与えられた財産を元手としてこの人生を生きているのです。父の財産をもらって家を飛び出していくこの息子は甘えている、と感じますが、まさに私たちも、自分で得たのではない様々な元手を神様から与えられて生きています。私たちも、父である神様に甘え依存して生きているのだし、そうでなければ生きることができないのです。父から与えられた財産をどう使うかは息子たちの自由でした。それと同じように、神様が与えて下さった人生の元手も、それをどう使うかは私たちに委ねられています。私たちはそれをどう用いているでしょうか。他の人のために、人との良い交わりを築くために用いているでしょうか。むしろこの息子のように、それを自分のため、自分の喜びのためにのみ用いてしまうことが多いのではないでしょうか。つまり私たちも、神様が与えて下さったものの使い方をしばしば間違ってしまい、その結果、人との間に愛し愛

される関係を築くことができず、大事な時に助けてくれる友を得ることができず、孤独に陥っていくという苦しみを味わっているのです。

我に返り、父の家こそが実は自分のホームだったことに気づき、父の愛を無にしてそこを飛び出してきてしまった自分の罪に気づいたこの息子は、父のもとに帰ろう、そして「もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。」と言おう、と思いました。彼は、自分が生きることのできる場所はあの父のもとにしかないことに気づいたのです。しかし同時に思い知らされたのは、もう息子としてそこへ戻ることはできない、ということです。こんな家にいるのは不自由で嫌だ、父はもう死んだものと思う、と言って飛び出して来たのですから、その罪に気づいて、反省して、「すいません」と詫びたとしても、それで元通り息子として受け入れてもらえるはずはない、それが人間としての自然な思いです。つまり彼は、自分にはもう帰る家がない、ホームを失ってしまったのだと思ったのです。それでも行くところが無いので雇い人の一人として生きていくしかないと観念したのです。

こうして彼は父のもとへと帰って行きました。出て行った時は意気揚々と希望に満ちていましたが、今やぼろぼろになり、乞食のような姿で戻って来たのです。「ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。」。まだ遠くにいる変わり果てた姿の息子に父は気付いて、走り寄って抱きついて、帰りを喜んだのです。それはこの父が彼のことを片時も忘れておらず、いつも帰りを待っていたということです。息子は「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。」とお詫びの言葉を語り出します。しかし父はそれを遮り、僕たちに「急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。」と言います。これは、「もう息子と呼ばれる資格はありません」と言っている息子の言葉を否定して、「あなたは私の愛する息子だ」と宣言したということです。お前は私の愛する息子なのだから、私の家こそお前の家だ、お前はいつでもここに帰ることができる、そうすれば無条件で温かく迎えてもらえる、悩みや苦しみを打ち明けることができ、それを分かってくれる人がいる、そういうお前のホームがここにあるのだ、と父は言っているのです。それは人間の常識に反することです。「父の愛を理解せず、勝手に飛び出していって無駄遣いをしてスッカラカンになったような親不幸者はもう息子と呼ばれる資格はない」というのが人間の常識です。しかし神様は、そういう常識に反して、私たちを赦し、愛する子として迎え入れて下さる、そのことをこのたとえ話は語っているのです。放蕩息子をこのように叱りもせずに迎え入れる父はなんて甘いんだ、と思うかもしれません。しかし、人を断罪するだけではそこに罪の赦しもなければ救いもありません。残るのは断罪する人の正当性だけです。

さて今日は弟息子が自分は本当に父親に愛されていること、そして自分が帰るべき場所は父親のもとであることに彼が気づいたことを見ました。さらに父親のもとに帰ることが最高であることが分かってもそれが出来ないことも分かっていました。つまり自分がどんなにがんばっても自分のすべての罪が赦されるということはありえないのです。自分の罪の赦しと救いは誰かに救っていただかなければ自力では無理です。この父親が弟息子の帰還を今か今かと出て待っていてくださったように、神は人間の救いのために最大の配慮をしてくださいました。それがイエス・キリストの十字架による罪の赦しと救いです。イエス・キリストはまたこう言われました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」ヨハネ 14:6

罪を抱えたままでは誰も天の御国に行くことは出来ません。そのあなたの罪、罪からの罰をキリストの十字架はすべて引き受けてくださったのです。そのキリストを信じるということが天国への道が確保されたということになります。それ以外に人の罪が赦され救われる道はないと聖書は語っています。聖書は人が救われるためにすることは神の前に自らが罪びとであるということを認め、その罪を赦すために主イエスが十字架にお架かり下さったこと、つまり主イエスこそ救い主であると信じることであると教えています。特別なことは何も要りません。最後に聖書のことばを読みます。

「わたしに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたに帰る。」マラキ書 3 章 7 節